

# サンデル教授人気の背景

マイケル・サンデルのハーバード大学での講義が「ハーバード白熱教室」としてNHKで放送されて以来、日本でも政治哲学に対する関心が高まっている。先月末に東大で行われた特別講義での議論の「白熱」ぶり

は、その関心が一過性のものでないことを示しているように思われる。サンデルの講義がアメリカのみならず、日本でも受け入れられるのはなぜだろうか。サンデルが政治哲学者として注目を浴びるようになったのは、一九八〇年代初頭である。当時、アメリカの政治哲学の主流はジョン・ロールズの立場に代表されるリベラリズムであったが、サンデルはその批判者として一躍名を馳せた。

リベラリズムとは、人がどう生きるかは基本的にその人の自由であり、社会システムや政策の正しさは、その自由を権利として公平に保障しているかどうかにかかるとする考え方である。正義は、人がどう生きるべきかに関わる「善き生」のあり方には中立的でなければならぬ、というのがリベラリズムの主張である。

サンデルが批判の矛先を向けるのは、この正義の善に対する中立性というリベラルな理念である。人間にとって正しいこと

は何かを見極める際に、善き生をめぐる考察は欠かせないと考えるからだ。

たとえば、信教の自由を基本的権利とすることの重要性は、多くの人にとって宗教が善き生に深く関わっていることと切り離せない。今日、格差の問題が



井上 彰

正義の問題として重要なのは、善き生の中身に立ち入らないうり理解できないというわけだ。

ただし、サンデルがリベラリ

## 日本の難局打開に有効な政治哲学

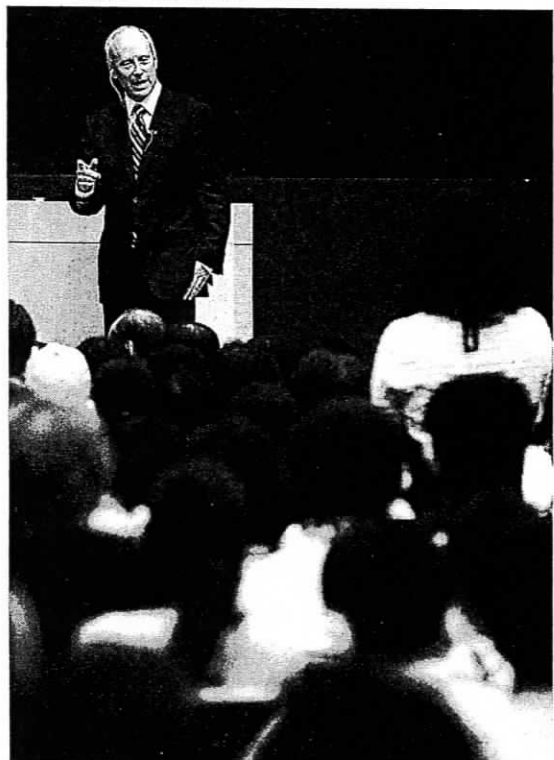
### 行き過ぎた市場主義に抗して

深刻さを極めているのも、善き生のための公共的基盤が、富裕層と貧困層の分断によって損なわれてしまふことと関係している。自由や平等の問題がなぜ

ズムを批判するのはあくまでその中立性志向に対してであって、リベラルな社会制度や政策に対しては同様にというわけではない。現にサンデルは、信教

あらゆるものが市場で取引される現在の傾向に強い懸念を示している。アメリカでは生殖から軍隊に至るまで、自由市場での取引に任せればよいとする議論が根強く存在する。そうした市場主義と批判的に対峙するには、市場化が善き生に関わる道徳規範を脅かしてしまうことを

リカルの思想潮流や問題状況を背景に、具体例を用いてさまざまな思想を検討するサンデルの講義は、われわれにとって遠い世界の話を扱うものではない。現に、日本もアメリカ社会と同じような問題を抱えている。日本でも行き過ぎた市場主義によって格差はますます広がりがり、医療・社会保障といった市民生活の基盤が掘り崩されつつある。



東京・六本木のアカデミーヒルズでも特別講義を行ったマイケル・サンデル教授—佐々木順一撮影

つまびらかにする必要があるので、サンデルのこの姿勢は八〇年代以来、終始一貫している。こうしたアメリカ、政治哲学

これは、日本の政治哲学者にとっては教訓とすべきことでもある。自戒を込めて言うが、もはや「誰が何を言った」式の教育・研究に終始することが許される時代ではないのだ。(いのうえ・あきら—群馬大講師、政治哲学)